

りむかふを見あげて打ば、利を失なふ事あり、其餘は臨氣應變なり、

全體拳を打に、一三五七九半ノ指を出ときは、手の表を出し、また二四六八十の手を出すときは、手の裏を出す、が本意なれども、段々拳の流行するより、さまざまと考へ、誰それが手は肩先より打おろす時は、何の手が出る、打出しには何の手を出すといふやうに、目かしこくなりしより、近世裏表にかゝはらず手を出す、裏表にかゝはるは、則陰陽なり、拳に己を捨るといふ事

五人びろいなどのとき、四人までひろいて、跡壹人にかゝりて、相手に初拳を負、二拳めもまた其相手にをりこまれたるとき、己をすて、打事あり、をのれを捨るといふは、我指にすこしも心をかけずして打事也、すこしにても我指にこゝろをかけては、相手を仕とめる事おぼつかなし、尤我指にこゝろをつけて打は、平常の事なり、今爰ぞといふけは、しきときのぞんでは、我指に心をとゝめず己を捨べし、

〔嬉遊笑覽^十飲^上〕類柑子に、或第宅のことをいふ、内から國のうたを扇にうつし、拳といふ酒のみかはして、松落葉は、やり歌かんふうらん替りヤンシウウスンイロマリヤンケンタニコタマサンチエマサンナハラリトサケノカンオナジコト梅ノ花トウライキウコ五ウリウスウ、これら詠りてさまざまにいひしなるべし、

〔拳會角力圖會^上〕土俵勝負拳之事

初拳一拳を勝ちまた續て一拳勝たるを、二番勝といふなり、中の拳一拳負たるとき、是を取分といふ、次の一拳勝負にてかちたる方、是をすなはち勝負勝といふなり、

京都堺などは、みな五拳の折詰といふて、指を合す度々に打込、四本折てはらひといふて、指をみな拂、五本めの拳一本合せ勝となるなり、是も向ふは一本も折ず、手前五本折ときは、二本の勝に